

ふるさと講座



ジオパーク 成り立ち編 ⑨

日本海の生物相

今

月号も、前号から引きつづき日本海の特徴についてお話していきます。今回は、そこに住む生物にスポットを当ててみます。

日本海では太平洋に比べて魚類の種類は少ないといわれています。淡水魚を含めて日本海域に生息している魚類は650～700種と見込まれていますが、本土の太平洋側ではこの約2倍の種類が知られており、さらに日本列島全体では、約5倍の3000種にもなるといわれています。この数字から読み取るに、日本海の魚類相は貧弱であるといえます。その理由として、当然面積の限られた環境ということもありますが、他に日本海の成り立ちからの影響が大きいと考えられます。どのようなことなのか、次のようにまとめてみました。

- ①日本海を囲む5つの海峡の水深がいずれも浅く、外海から半隔離された内海的様相をもつため、外洋からの深海魚などが侵入できない。
- ②日本海では潮汐差が小さいため、潮間帯や干潟などの環境が発達しない。したがって、その環境を好む生物相も薄い。
- ③日本海の形成の歴史が浅いため、生物相の発達が不十分である。
- ④最終氷期の時代に日本海の水位が下がり、貧酸素となり大多数の生物が死滅したと言われている。
- ⑤日本海の南側は九州地方までなので温帯気候のみとなり、南西諸島などに該当する生物相の最も厚い亜熱帯気候が存在しない。

このように大太平洋と比較して多様性が脆弱な日本海ですが、この海の生態系にとって重要な種に、キュウリエソの存在があります。記憶されている方もいらっしゃるかと思いますが、この魚は2012年に「隠岐の島の海岸でキュウリエソが大量に打ち上げられた」とニュースで報じられて一躍有名になりました。キュウリエソは一般的に**深海魚**（※）といわれていますが、深海ばかりに留まるわけではなく、実は30～40mの浅い海域と数百mの深いところを行き来しているようです。最終氷期後の日本が温暖になった時代、水位が上昇しても水温はまだ低く、そこに太平洋から進出できた

のが低温に強いキュウリエソだったのです。これが浅海の魚の餌にもなっており、キュウリエソは日本海食物網を支えている重要な存在であり、この魚がいなければ日本海の生態系は保たれないといっても過言ではないと思われます。

最近、神秘の深海生物としてテレビなどによく登場し有名になったダイオウイカも日本海に生息しています。その証明として、2015年3月7日、網にかかったダイオウイカが豊田港に引き上げられたことがあります。足の先まで入れると3m以上もあり、まさにその名にふさわしい巨体でした。私も実物を見たのはこの時が初めてで、日本海にこの巨大生物が生息していることを初めて知りました。

〔海士町文化財保護審議委員 深谷 治〕



(※) 一般に、水深200mより深い海域に住む魚類